

ていた先生でしたが、案外ちゃんと見るものは見ているのだなあと思うことがたびたびでした。そしてお会いするとあたたかさや落ちつきが感じられ、心がなごやかになります。生徒の間は勝手なもので、先生の一面しかわかりませんでした。私は卒業後も年に2度位ですがお会いすることができ、又恩師と心から思える先生に出会えて本当によかったと思っています。（12回生）

松井先生との一年間

佐橋美智子

私に、今までに本当によかったと思うことが二つある。一つは、お茶大に学んだ一年間である。昭和39年度専攻科の一年間程、大学で学ぶことの楽しさを味わったことはなかった。一日、一日をあれほど大切にすることもなかったように思う。今でも、あの時を思い出すたびに、充実感で満たされてくる。そして、その一年間は松井先生と過ごした日々でもあった。

入学早々、渡辺光先生から、論文指導は松井先生から受けられるように、と言い渡された。第一印象の松井先生は、みるからに研究の虫、はたして私は、大丈夫やっていけるだろうか。早速、松井先生の研究フィールドである那須野原扇状地の集落を論文のテーマとし、先生の研究室で指導を受けることになった。それと同時に、お茶大地理学科の充実したカリキュラムに感心した私は、専攻科の講義と平行して、2・3・4年生のいくつかの講義も聴くことにし、その上、教職の単位まで取得することにしたので、スタートから忙しい毎日となった。

最初の頃、松井先生の前では、身も心も緊張した。5月だったと思う。先生の目の前で色鉛筆で地図の作業をしていた際、肘の下の汗で、色がよけいなところにまで汚くついてしまった。「地図を汚してはいけない。ハンカチでも手の下に置くぐらいの心づかいがなければ、だめですよ」ときびしい語調で注意された時は、冷汗が出た。

夏休みに入る時、先生は「ずっと研究室に来ているから、いらっしゃい」と、心よく私を受け入れてくださったので、長い夏休みの間、ほとんど毎日研究室に通った。この時は朝から夕方まで頑張ったので、ついに5日間ほど休みをとって、富士山に登ったり、海に行ったり、映画を何本もむやみにみたりして遊びにも没頭した。

はじめは、とっつきにくくて、こわい先生と思ったが、松井先生のきびしさと親身な指導に、私は加速度的に研究が楽しくなっていった。そしてまた、各先生方の講義も素晴らしく、渡辺先生の愉快な話や友だちも増えて、研究以外にもお茶大の生活は楽しくなっていった。

松井先生の研究室の一日のはじまりは早い。まだ大学全体が静かなうちに、先生の研究室にはあかりがつく。大きなイスにちょこんと腰かけて、手のひらに乗るほどの、手垢で汚れた小さな本を、毎日決まって読む。何が書いてあるのか一番興味があったが、ついに聞かずじまいとなってしまった。紅茶は、砂糖もレモンも何も入れないものを飲む。私もいつの間にか、その方が紅茶らしく感じるようになってしまった。昼食は手作りのサンドイッチ、キャベツのせん切り、レーズン、そしてみかんかりんごか、その季節の果物。このメニューはずっと変らなかつた。いつも食事の時はくつろいで、いろいろ話をされた。昼食後は昼寝、その後は講義、研究と息つくひまもないほどだった。先生は規則正しく、かつ几張面である。特徴ある小さくまるっこい字を、原稿用紙に丹念に書いている姿は印象的であった。

研究フィールドの那須野原扇状地には、3～4回ほど同行させていただいた。こうした巡検、実地の調査指導、研究室での指導など爽やかに松井先生は私を鍛えてくださった。他大学からひよっこりやってきた一学生に、忙しい研究生活の一部をさいてこれだけご指導くださったのは、なみなみならぬことだったと思う。書きあげた論文は、松井先生の満足を得るにはほど遠かったかもしれない。しかし、私は先生のお蔭で、宝とすべき一年間を送ることができた。そして、私の結婚式にいただいた先生の祝辞は、どっしりと私の心の支えになっている。「この努力を一生続けて下さい」この言葉はあの一年間と同じく、私の宝である。

— 松井先生、本当にありがとうございました。 — (11月20日)(専攻科3回生)